

さぬきふうぞくまい 讃岐風俗舞

舞曲「讃岐風俗舞」は、^{さぬきいなつきうた}讃岐稲春歌 1 曲・^{さぬきふうぞくうた}讃岐風俗歌 1 曲・^{さぬきふうぞくまい}讃岐風俗舞 4 曲の計 6 曲から成っており、「讃岐風俗舞 一具」とも呼ばれます。この楽曲は、大正時代、讃岐国が主基国（主基田）に勅定された折、大嘗祭における、^{だいじょうきゆうすきでん}大嘗宮主基田の儀式に奏される為、宮内庁により、「^{すきいなつきうた}主基稲春歌、^{すきふうぞくうた}主基風俗歌、^{すきふうぞくまい}主基風俗舞」として、作詞作曲のうえ、舞の手ぶりが作られたものです。

大嘗祭には、「悠紀」・「主基」それぞれの地方の風景や風俗を表した新作舞曲が祭典の中で奏せられることが通例となっており、歌詞となる和歌は選ばれた歌人が作り、その地方の風景や地名などを詠み込みます。作曲と作舞は宮内庁楽部が担当し、作られた和歌に、楽師がそれぞれの地域の民謡や古くから伝えられてきた郷土舞などを取り入れて、曲と舞をつけていきます。

本来これらの楽曲は、天皇陛下御即位にあたり、一代に一度限り奏進されるもので、ほとんど後世に残らない楽曲ですが、金刀比羅宮ではこの記念の歌舞をこのまま失くしてしまうのは惜しいと考え、長く後世に伝えるために職員を派遣し、宮内省楽師に教えを受け、楽曲を持ち帰り、現在まで伝わっております。その際、^{すきいなつきうた}主基稲春歌は^{さぬきいなつきうた}讃岐稲春歌に、^{すきふうぞくうた}主基風俗歌は^{さぬきふうぞくうた}讃岐風俗歌に、^{すきふうぞくまい}主基風俗舞は^{さぬきふうぞくまい}讃岐風俗舞に改められました。

…… 次ページの『「讃岐風俗舞 一具」の歌詞』もご覧ください。



御田植祭での讃岐風俗舞

「讃岐風俗舞 一具」の歌詞

「讃岐風俗舞 一具」の作詞は、大正 4 年、東宮侍従長子爵入江為守作の和歌であり、それぞれの楽曲内に、讃岐の風土を表した地名が含まれています。

讃岐稲春歌

たまも さぬき やまだ あら よ あき た ほ いね つ
玉藻よし 讃岐の山田 新た代の 秋の足り穂の 稲や春くらむ

(意味) 讃岐の山田村では、御代始めのこの豊かな年に際し、よく実った稲を春いているのであろう。

讃岐風俗歌

くもぬまで たか ひび さとびと つづみがおか ちよよ こゑ
雲井迄 高く響かむ 里人の 鼓岡に 千代呼ばふ声

(意味) 鼓が岡で、里人の「この御代が千代萬代に、いついつまでも栄行かん事を祝う声」は、雲のある天つ空にまでも高く響くであろう。

讃岐風俗舞

参進曲

おほぎみ みよし めす とき かぜ あづきしま ふ わた
大君の 御代知ろし召す 時つ風 小豆島にも 吹き渡るらむ

(意味) 我大君の御代を治め給うにあたり、天も穏にして、時津風（良いタイミングで吹く追い風）が遍く吹き渡るが、その風は小豆島にも吹き渡るであろう。

舞曲

よろこ くも み むらさき いろ にほ あき はぎはら
慶びの 雲と見えけり 紫の 色に匂へる 秋の萩原

(意味) 秋の萩原には一面に萩の花が紫色に咲き匂うて、ちょうど、御代を祝する瑞雲のように見える。

舞曲

ふ かぜ えだ な おほみよ いやさか まつやま さと
吹く風も 枝を鳴らさぬ 大御代に 弥栄ゆらむ 松山の郷

(意味) 天穏やかに、吹く風も枝を鳴らすに至らぬ、この太平の御代において、松山の郷は、いよいよ栄えるであろう。

退出曲

よろづよ かげさや て つき かがみ みが たま うらなみ
萬代の 影亮かにも 照る月の 鏡を磨く 玉の浦波

(意味) 君が大御代のごとくいついつまでもさやかに照らすべき月は、ちょうど鏡のように澄んでいるが、それをなおも磨くように、玉之浦の波が寄せては返している。

※ 赤字は、讃岐の風土を表した地名。